

「コンピュータへの道」

高橋秀俊先生の自叙伝的なコンピュータへの道を読んだ。
繰り返しソフトウェアの大事さ、ソフトウェアに関して日本が立ち遅れていることに警鐘を鳴らされているのが興味深い。
コンピュータの本質はハードウェア(だけ)ではないというのが伝わってくる感じ。

メモ.

p.7

LSIの製造法は、簡単にいえば、写真の焼付で機械を作るのである。
写真とか印刷とかいいう従来「情報」を複製するのに使われていた技術が、
今日では「情報処理の機械」を作るのに広く使われているのである。

p.76

とにかく計算機の成否を決めるのは当時から今日まで、いつも記憶装置にあった。

p.82

『ザ・プレパレーション・オブ・プログラムズ・フォー・アン・
エレクトロニック・デジタル・コンピューター』

https://en.wikipedia.org/wiki/The_Preparation_of_Programs_for_an_Electronic_Digital_Computer

p.90

要するに計算機は、よほど信頼性のことを考えて設計しなければならない
ということにあった。

p.150

私が「割込み」を考えたのは実は一つの哲学に基づいている。それは主体性の問題である。
計算機は人間が使うものである。であるから、いついかなる時にも、
人間の主体性が保たれねばならない。

p.157

また、われわれの考えは、計算機はソフトウェアでいろいろな働きができるのだから、
ハードウェアはできるだけ簡単にすべきだということであった。

p.179

これからのエンジニアにはそういうことではなく、エンジニアリングの基礎となる
一般的な考え方を教えることが必要だ。

こうしてできたのが岩波書店から出た講座「基礎工学」である。

<https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000001428027-00>

p.193

もっとも逆にいえば、日本のメーカーを奮い立たせ、追いつくこと努力させたのもIBMで、
日本の計算機産業をここまで伸ばしたのはIBMの功績だということも恐らく真実である。

やはり今日の情報システムの設計者に欠けているのは、「人間のためのシステム」だという認識だと思う。そして、この点が、これからの情報処理教育の一つの眼目でなければならない。「人間が計算機に使われている」という印象をもつ人が、一人でもいてはならないのである。